

富山県中央植物園

所在地：〒939-2713 富山県富山市婦中町上轡田 42

TEL：076-466-4187

mail：botanic@bgtym.org

URL：http://www.bgtym.org/

開園時間：9:00-17:00（2-10月）、-16:30（11-1月）

休園日：毎週木曜日（4月およびお盆中は木曜日が祝日の場合は開園）、年末年始（12/28-1/4）

植物園の概要：約24haの敷地には5棟の展示温室とサンライトホールがあり、約4,700種類の植物を収集展示しているほか、ラン展など様々な企画展を開催して

います。特に、全長300mの並木状に植栽されたソメイヨシノをはじめとする約100品種のサクラや友好提携している中国科学院昆明植物研究所から導入した多くの雲南省産植物は見応えがあります。

植物保全活動：県内の植物調査や絶滅危惧植物の保全など植物保全に関する調査・研究、教育・啓蒙活動を幅広く行っています。



富山県中央植物園における植物多様性保全の取り組み

富山県中央植物園は平成5年の開園当初より調査研究を事業の大きな柱の一つとしています。植物多様性の保全に関する活動としては、富山県内に生育する植物の調査・研究や絶滅危惧植物の調査・保全などを行なっています。

■富山県内の植物調査 —富山県植物誌改訂を目指して—

各地域の植物誌は植物多様性の保全に取り組む上で最も基礎的かつ重要な情報源になります。富山県には1983年に発行された『富山県植物誌』がありますが刊行から約30年間が経過しています。自然環境の変化が著しい今日、植物誌は定期的に改訂されることが望ましく、植物園では改訂版の発行を目指して活動しています。しかし、県内全域の調査を行なうには職員の活動だけでは限界があり、「植物園友の会」に「植物誌部会」を設立して、『富山県植物誌』の改訂にむけた県内の植物調査及び標本作製を定期的に行ってい

ます。1996年から2012年の間に確認された富山県新記録植物が156種ありますが、その多くはこの友の会の活動で確認されたものです。



植物調査を行う友の会会員

■富山県の絶滅危惧植物の保全

富山県中央植物園の職員も参加して現地調査が行われ、2012年に『富山県の絶滅のおそれがある野生生物—レッドデータブックとやま 2012』

が出版されました。これは、2002 年に出版された富山県レッドデータブックの見直しを行ったもので、維管束植物に関しては、掲載分類群の数が前回の 376 から 439 へと大幅に増加しました。

ラン科は植物の仲間で最も種数が多い一方、絶滅の危機に瀕している種も多数あります。富山県ではレッドデータブック掲載種の約 14%にあたる 61 分類群がラン科植物です。園芸的価値が高く自生地からの盗掘が絶えないラン科植物は、種子からの繁殖方法を確立して流通させることが保全のための有効な方法のひとつであると考えられます。これまでに、エビネをはじめとする富山県産ラン科植物 10 種の試験管内での種子発芽に成功しています。

エッチュウミセバヤは野生絶滅とされていた富山県固有植物ですが、1996 年に富山県中央植物園の調査により再発見されました。しかし、自生地の崖は自然崩落を起こしやすく、絶滅のおそれがあるため、植物園内で増殖と系統保存を行っています。



富山県固有種のエッチュウミセバヤ

水生植物のミズアオイも絶滅の危機にある植物のひとつです。ミズアオイは突然の大発生や消失が観察されますが、これは種子の発芽特性に起因することを明らかにしました。この研究活動がマスコミに紹介されたことから、県内各地から情報が寄せられ、多くの生育地が確認されました。このように、マスコミや地域住民を巻き込んだ活動がこれからの植物多様性保全のためには欠かせ

すことができません。

立山は富山県を代表する景勝地で、中部山岳国立公園に指定されており、多くの貴重な高山植物が生育する場所です。他地域からの植物の侵入を防ぐため、バスの終点の室堂ターミナル（標高 2,450m）では登山者の靴底の土壌をフロアマットを使って落としてもらっています。この土壌に含まれる種子の発芽試験を 2006～2010 年に行ったところ、最も多かった年で約 50 種類の植物が確認され、中には台湾原産のイチジク属植物やトマトまでみられました。また、2010 年からは立山黒部アルペンルート沿線の外来種の侵入状況のモニタリング調査も実施しています。

■中国雲南省産希少野生植物の保全生物学的研究

中国雲南省は「野生植物の王国」とも称される豊かな地域です。友好提携している中国科学院昆明植物研究所と「中国雲南省産希少野生植物の保全生物学的研究」というテーマで 2001 年から 2010 年の 10 年間にわたり、ベゴニア属やマメ科、アヤメ科、ツバキ属に関する共同研究を行ってきました。その後も、現地調査をはじめ、細胞遺伝学的な研究、組織培養による増殖などの共同研究を継続して行っています。



中国雲南省でのトウツバキの自生地調査

■植物の系統保存

植物園は絶滅危惧植物の生息域外保全や有用遺伝子資源の系統保存の場として重要な役割を

担っています。富山県中央植物園では、文部科学省のナショナルバイオリソースプロジェクト（NBRP）による広義キク属をはじめ、サクラ属、ツワブキ、エッチュウミセバヤなどの系統保存を行っています。これらは、遺伝子資源としての利用や自生地復元への利用などが期待されています。

■植物多様性保全に関する啓発活動

植物園の持つ情報発信の機能も植物多様性の保全に重要な役割を果たしています。植物多様性の保全には研究者の力だけでは不十分で、地域住民を巻き込んだ活動が必要です。毎年植物園で開催される『TOYAMA 植物フォーラム』では、これまで「希少植物の保護と植物園の役割」など、植物多様性保全に関するテーマを取り上げてきました。近年、ブラックバスをはじめとする外来生物が日本の在来生物へ及ぼす脅威が問題になっていますが、植物の世界も例外ではありません。富山県氷見市のサンインギク個体群の調査では、シマカンギク六倍体と園芸菊との交雑が進んでいることを明らかにし、純粋な日本在来種が人間の活動の結果、絶滅もしくは減少する恐れがあることに警鐘を鳴らしています。

今後、植物園が担う植物多様性の保全のための役割は益々増加していくと考えられますが、1 植物園が行える活動には限界があります。地域の人々の協力や国内外の植物園、研究機関とのネットワークにより、地球上の植物多様性を保全していく必要があります。

（神戸 敏成、2013 年 1 月）